

福岡県指定史跡

山家宿西構口並びに土塀

宿駅（宿場）には、町の東西もしくは南北の出入り口に石垣の上に漆喰の塗られた練塀を築き、瓦葺き屋根を伏せた土塀で、両袖を道の両端に突き出したような形の門塀が設置されていました。この門塀は筑前国・福岡藩領内の宿駅にはよく見られる施設で、これを構口（写真参照）と一般に呼んでいます。

構口は、敵の侵入を防ぐために直角に曲げられた鉤の手（杵形とも）の町並み同様、宿駅（宿場）の防衛機能の一つとして設置されたと考えられています。

筑前の宿駅には構口の施設があったことは、江戸期（文政四年（1821）刊）の地誌、奥村玉蘭『筑前名所図会』や山内陽亭「田嶋外伝浜千鳥」の挿絵・「原田駅家之真景」図など、江戸期の絵図類でも確認できます。

現存しているものでは、長崎街道・筑前六宿の山家宿の西構口、木屋瀬宿（北九州市八幡西区）の構口と唐津街道の青柳宿（古賀市）などの構口に同様の構造が見られますが、石垣と土塀の門塀が両袖にほぼ完全な形をとどめているのは山家宿の西構口のみでとても貴重です。

山家宿の構口は、町の東西の出入り口に設置されていたようで、町割りができた慶長一六年（1611）には設置されていたと推測されますが、設置年代を示す記録はありません。江戸へ向かう方角に設置された東構口（冷水峠方面）は現存しておらず詳細はよくわかりませんが、当初は下茶屋（薩摩屋）付近にあったのが、その後、宿場の町域、町並みが東構口の外にも拡大し、横町（田町、



山家宿西構口

仲町とも)、新町など新しい町が設置され、そのさらに外側へと移動されたようです。東構口は、現在の太庄屋役宅跡付近の字名が新町字名、その隣が町口字名であることから、そこが宿場・町域の境目で、その外側に設置されていたと推定されます。

長崎へ向かう方角に設置された、西構口(原田・天山方面)は設置当初から、現在の上町の場合にあったようです。奥村玉蘭『筑前名所図会』の「山家驛」の図を見れば、山家宿の宿駅の構造がよくわかり、西構口も現在位置にはつきり記されています。

幕末の嘉永三年(1850)、長州藩の学者・尊王思想家の吉田松陰が九州遊歴の旅で山家宿を通過した際に、山家宿の構口を見たようで、「道中の諸駅を歴観するに、駅の前ヒメガキ後において左右袖の如く石垣を築き、女ヒメガキ塙を附くる者多し。又事ある時里門を作るがために便するか」と構口のことを有事に備えた防衛施設として役立つものであると、『西遊日記』に印象深く記しています。

西構口は、平成17年(2005)3月の福岡西方沖地震で一部損壊しましたが、平成19年(2007)に修復工事が完了し、福岡県の文化財に指定されています。現在地元では、「山家の史跡を守る会」や山家小学校などを中心に、山家宿開設と長崎街道・冷水峠開通400周年を契機として、地元住民による山家宿の歴

史や、史跡、町並みを郷土の歴史・文化遺産として保存・活用する取り組みが行われています。

山家宿西構口には、車では国道200号・冷水有料道路や国道386号から、公共交通機関ではJR筑豊本線(原田線)の筑前山家駅や西鉄バスのバス亭から、また西鉄筑紫駅や朝倉街道駅、JR原田駅方面からも歩いて、旧長崎街道のルートをたどることができます。

西構口の付近には、昭和5年(1930)に福岡県が建て、「今構口の遺蹟の残れるもの甚だ稀なり」と記された史跡説明板、「筑前山家宿初代代官きりやまたんば桐山丹波遺蹟」の石碑、その正面には、男装の麗人・遊歴の女流漢詩人 ほらさいびん 原采蘋の私塾跡と石碑、山家宿の町並み略図の説明案内板もあります。

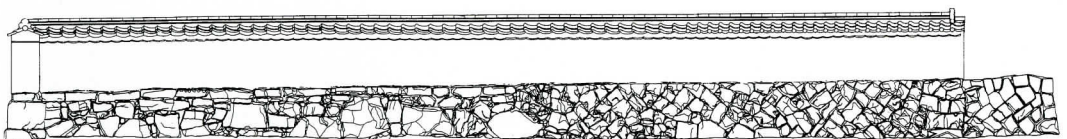
また藩主の滞在所や参勤交代の宿泊所(本陣)となった御茶屋跡、各宿駅に配置された宿場代官の在所・代官所跡、代官の手代であった下代の屋敷跡などの宿駅関連の史跡を散策できます。ぜひゆっくり山家宿を歩いてみて、風情ある旧街道や宿場町の町並みを堪能してください。

(竹川克幸)

参考文献

『筑紫野市史』、『筑紫野の指定文化財』、『筑紫野市文化財調査報告第65集 山家地区史跡整備調査報告1』
河島悦子『伊能図で甦る夢 長崎街道』、『長崎街道 大里・小倉と筑前六宿(のぶ工房)』、『アクロス福岡文化誌1 街道と宿場町』(海鳥社)

県指定部分 ←—————|



0 4m

山家宿西溝口並びに土塀北側実測図